

休日、行事等の都合で、ほぼ一か月ぶりの月曜朝礼の講話でした。子どもたちには次のようなお話をいたしました。

お久しぶりの朝礼です。みなさんお元気でしたか。突然ですが、今から百四十年近く前の一八八六年の今日。つまり、十月二十四日、和歌山県の沖の熊野灘で、イギリスのノルマントン号という船が沈没しました。

日本人の乗客二十五人は、全員亡くなりました。船長は、日本人には英語が通じず仕方なかったと話したそうですが、どうも日本人を助けようとせず、見捨てたようなのです。

この頃は、領事裁判権というものが認められている時代。簡単に言うと、イギリスの大使館にいるお役人が船長たちを裁くので、どうしてもイギリス人びいきの裁判にならざるを得ない状況でした。案の定、船長は無罪。

この判決に日本国内の人は誰も納得せず、再び裁判が行われましたが、二十五人も亡くなっているというのに、船長がわずか三か月間ろうやに入るといふ判決で終わりました。

この事件をきっかけに、日本では、不平等な「領事裁判権」を無くすこと、「関税自主権」と言って、輸輸入品に日本の国が主体で、税金をかける権利を得ることが悲願となり、外国との難しい交渉が始まることになったと、歴史の教科書に出ています。

さて、それから四年後の一八九〇年。また

和歌山県の沖、ノルマントン号が沈没した地点より少し南の場所で、今度は、現在「トルコ」と呼ばれている国のエルトゥール号という船が沈没しました。それを知った大島村（現在の串本町）の人々は、総出で船員の救助に当たり、布団や衣服、食べ物を持ちより、献身的に看病したそうです。

五百名以上の人が亡くなり、生き残ったのはわずか六十九名でしたが、日本の船でトルコの国へ送り届けられたそうです

これで話は終わりません。一九八五年、イランとイラクという国が戦争を始めていました。イラクのサダム・フセインという大統領は、「今から四十八時間以降にイラン上空を飛ぶ飛行機はすべて撃墜する。」と、宣言しました。日本人はイランにあるテヘラン空港に集まり、救援機を待っていました。日本からの救援機はなぜか来ません。



この時、二番目の飛行機がイラン領空を脱出したのは、攻撃一時間前というギリギリのところだったそうです。

トルコでは、小学校の教科書に、「トルコ人を救った日本」というテーマで、エルトゥール号のことが紹介されているので、エルトゥール号遭難の際に、日本人がどれほど献身的に尽くしてくれたのか、ほとんどの人が知っているのだそうです。テヘラン空港に救援機を飛ばしてくれたのは、あのエルトゥール号救助の恩返しだったのです。

六年生は社会科で、歴史を勉強していますね。歴史は暗記科目だと思っている人はいませんか。それは、とんでもない誤解です。

過去の歴史を深く学ぶことで、現在や未来を考えることにつながります。過去の出来事から、なぜそれが起きたのか、その理由や因果関係を考え、それを現代の生活に生かす。

過去の人々の英知や失敗から学び、それを現在や未来に生かす。歴史からそういう力を身につけることが大切なのです。

トルコの人たちのように、自分たちの受けた恩義を忘れず、それをすてきな形で恩返しする。こんな形ですてきな歴史が繰り返されていくことを強く望みます。そのために歴史の勉強があるのではないのでしょうか。

歴史の勉強の重要な意義について、君たち自身で考えてみてくれるとうれしいです。

(立教小学校校長 田代 正行)

そんな中、トルコから救援機が二機飛んできて、日本人二百十五名を救出。トルコ経由で日本に送り届けてくれました。